比べ読みで身につく学力

金子直樹

1　はじめに

「作品を比較するという作業が現代文の中でしかしたことがなかったので、とても新鮮でした。」

「『文法を覚えなければ』『古語単語を暗記して、尊敬語などを頼りに文意を読み取らなければ』と思っていたのですが、今日はこの古文の面白さ（今日のビデオで言えば枕草子における「をかし」）を知りたい、発見したいという気持ちから、資料プリントを読んでいました。」

右の感想は、広島大学文学部2、3年生に、高校2年生古典の授業ビデオを視聴させての感想である。教育学部以外の学生を対象にした「教育実習指導C」という講義の一部に、中・高等学校での授業の実際から学ぶという部分があり、附属学校の教員が出向いて授業の解説などを行う、その講義後の受講カードにあった記述である（09年度12月実施）。

附属学校教員として毎年多くの教育実習生を指導する際に、彼らが中・高等学校時代に「学習者」としてどのような授業を受けてきたのかを問うことにしている。大学での様々な講義内容とはまた別の意味で、「すり込み」のような形で彼らの「古典の授業観」を大きく規定していることが多いからである。その返答として依然多いのが、古語単語や古典文法の習得、あるいは一文ずつ口語訳を仕上げることが中心の授業である。

もちろん、前記引用の文学部学生の感想や教育実習生の返答には、教育実習に対しての恐れや、附属学校教員へのおもねりによって、「回想」にバイアスがかかってもいよう。また、この拙論にさえ目を通してくださるような私たち教員仲間による、長く広い教育実践や研究の積み重ねによって、国語教育は着実に変化しているはずでもある。しかし一方では、特に古典学習に関しては、単語や文法の知識や口語訳の技能の習得と、あとは鑑賞で終わり、という現実もあるようである。

新しい指導要領では、新設「古典B」の内容として「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。」という文言が加わるらしい。その意味

の解説は私の任ではないが、「読み比べ」を授業に用いることは、少なくとも「国語科」の教員である限りにおいては、指導要領云々以前の当然のことであると思う。

例えば現代文で「舞姫」を扱う場合には、多くの教室で「普請中」や「妄想」と組み合わせての授業展開が行われているはずである。むろん高等学校の授業で鴎外の作家論を行うというのではなく、太田豊太郎という一人の青年の愛と裏切りの物語であれ、近代青年の自我というテーマであれ、現実と虚構との間を行き来する文学の力であれ、それはその教室の生徒と教員との好みの問題で、何であっても構わないだろうが、異なるテキストを比較検討する「読み比べ」の過程を加えることで、生徒は自身の読みをいったん対象化することになり、それが単なる感想から批評・評価へと深化してゆく契機となる。

このような授業展開は、私たち国語科教員としては普段から用いている基本の手筋で、現代文を例に取るまでもなく実は古典でも、例えば『徒然草』を扱う場合には、ほとんどの教室で、教科書の教材に加えて類似の章段を用いて学習の幅を拡げ、深化を図っているはずである。それを、他の古典の学習においても普通に行おう、というだけなのである。

その際の問題点は、何のために「読み比べ」を行うのかということである。情緒的な古典世界（人間）像をより精緻に理解するため、ではない。（新しい指導要領の「国語総合」では、「伝統的な言語文化への興味・関心」などが求められるようなので、自戒を込めて注意したい。）「昔の人の考え方が分かった」「古典の世界（感覚・人間関係…）の良さが分かった」で終わりにするのではなく、生徒自身がそのように理解する自己を追跡して、テキストと自分との関係を見出し、自己を問う契機となるように仕向けることが重要なのだと思う。前述の「批評」ということを、思い切って簡単に言ってしまえば、「読みの構えの獲得」や「読みの方法の習得」ということであると思う。

以下に、そのようなことを目指しての実践例を幾つか報告する。

2　中学校の古典学習から

以下は、広島大学附属福山中学校07年度2年生の、年間の古典学習の内容である。（【学習のめあて】など、生徒に配布したままの表現）

【教材】

1、『徒然草』から

①序段　徒然なるままに、日ぐらし、硯に向かひて、

②92段　ある人、弓射ることを習ふに、

③109段　高名の木のぼりと言ひしをのこ、

④41段　五月五日、賀茂の競べ馬を見はべりしに、

⑤235段　主ある家には、すずろなる人、

2、「説話」から

①「壬生忠見の悶死（平兼盛との歌合わせ勝負）」（『沙石集』『百人一首一夕話』の比べ読み。）

②「藤原長能の悶死（藤原公任の口出し）」（『沙石集』『十訓抄』の

比べ読み。）
③「兼方の悪口」（『宇治拾遺物語』『今物語』『袋草子』の比べ読み）
3、『平家物語』から
①「敦盛最期」（覚一本（日本古典文学大系）と延慶本との比べ読み）
②「河原兄弟最期」（覚一本と百二十句本（日本古典集成）との比べ読み）
4、『百人一首一夕話』
5、『論語』から、十二編
【学習のめあて】
0、古典に親しむ基礎力を付ける。
①古文は歴史的仮名遣いに注意して、正しく本文を音読し、筆写できる。
②漢文は訓点（返り点・送りがな）の規則に注意して、正しく書き下し文を書くことができる。
③古文や漢文に特有の表現法・言い回しに慣れる。
④古語単語や漢文語句の意味に注意しながら、本文の内容を正しく理解できる。
1、『徒然草』に表わされる筆者兼好のものの見方を理解する。
①兼好のものの見方から、私たち自身の日常を振り返る。
②兼好のものの見方と比べることで、私たち自身のものの見方に新たな発見をする。
2、「説話」に登場する人物像を理解する。
3、『平家物語』での登場人物の描き方を理解する。
①複数のテキストを比較することで、人物の描き方の違いに注目し、その違いをもたらす語り手の視点を理解する。
②同じ出来事でも、語り手の視点の違いによっては描かれ方が違うことを理解し、物語と語り手との関係についての考えを深める。
4、『百人一首一夕話』全首の読解を通して、古文を読み書きする経験を積む。また、掛詞や比喩などに注意して、和歌解釈の仕方についての経験を積む。
5、『論語』に表わされる孔子の思想を理解する。孔子の思想から、私たち自身の日常を振り返る。

（1）「説話」の授業

中学校では、古典に親しむ手だてとして「百人一首」を用いることが多い。当校でも中学一年生から暗唱をすすめ、校内百人一首大会も開催して古典に親しむ取りかかりにしている。07年度中学2年生では、暗唱の次の段階として、『百人一首一夕話』を用いて、和歌の意味の理解と共に古文を読み慣れることをめざした。『百人一首一夕話』は江戸時代の初学者用参考書で文章も平易であり、記述の体裁も、前半の簡単な歌意と後半の作者などの故事に明確に分かれており、特に歌意については出典の後に「～といふ心なり」の形でほぼ統一されているので、まことに読みやすい。中学2年生用に、前半の歌意の原文に全文口語訳を附したプリント（一首がB5版一枚に収まる分量）にして与え、「和歌解釈の部分を（歴史的仮名遣いに

注意して）原文で筆写する」という課題として、年間を通して百首全部を扱った。ほぼ「作業」ではあるが、ある程度意味の分かる古文を、自ら筆写して古文に慣れるということがねらいである。その応用として、後半部の作者などの故事説話についても部分的に用いた。

この『百人一首一夕話』中の、いわゆる歌説話を用いて、2①『沙石集』『百人一首一夕話』の比べ読みでは、『沙石集』の、壬生忠見が歌合わせに敗れたことがきっかけで悶死したという記述と、前記『百人一首一夕話』の、「…負けはべりしより胸ふたがりて、かかる重病になりはべりぬと申されしが、つひにこの病によりてむなしくなられたりと言へり。この事は『沙石集』に出でたれど、「家集」を考ふればその後もながらへられたるやうに見ゆれば、その実否は確かに知られず。」という、事実の有無をめぐる差異に焦点を当て、2②『沙石集』『十訓抄』の比べ読みでは、『沙石集』の、「公任卿に春は三十日さふらふにやと難ぜられて、胸ふさがりて覚えけるほどに、やがて病つきて、つひに失せにけり。道を重くする執心にや。」という長能への批判と、『十訓抄』の「かくほどあるべしとは思ひたまはざりけれども、さばかり慮りある身にて、なにとなく、口疾く難ぜられたりける、いと不便なりしか。」という公任への批判という、人物への評価の観点の差異に焦点を当てた。これらの段階をふまえて、2③『宇治拾遺物語』『今物語』『袋草子』の比べ読みでは、説話の内容を正確に読み取るという段階から、どのように読み取っているのかを自ら意識しながら読むという段階への読みの深化を経験することをねらいとした。以下は生徒の学習のまとめである。（傍線は引用者。以下同じ）

○**まとめA**：語り手が視点を変えることによって私たち読み手は、それぞれ印象に残る部分が違う。兼方派は、地位が低くても正しいことは正しい。通俊派は、なんと言ってもやっぱり『後拾遺集』の撰者になるほどだし、兼方に対しての言葉は少し間違っただけ、と思ってしまう。読み手は、「地位」と「論理的」というキーワードで「兼方の悪口」を受け取っているのだと思う。

○**まとめB**：『宇治拾遺物語』の作者は、この出来事をただそのままに書き出し、それを読む読者が自分でどちらが良い悪いを決めさせようとしているのだと思います。『今物語』と『袋草子』ではどちらが悪いのか良いのかはっきりと書かれていて、「ああ、作者はこう思っているのだな」ということが分かったが、『宇治拾遺』の文ではどちらが悪いとも良いとも言っていない。このような文を読むと、読者は自分の想像でどちらが良いか悪いかを理解する。そうした方がはるかに気持ちがいいからです。詳しく言えば、自分の願望が、「ああ、この人はこんな人であってほしい、そうに違いない」というものによって解釈するのです。作者は、こんなふうに文を書くことによって、一人一人みんな捉え方が違う、ということを示したかったのだと思います。

（2）『平家物語』の授業

前記「説話」の授業の発展として、長い物語内容の正確な読み取りから、どのように読み取るのかを自ら意識化しながら読むという段階へ、「読み」の進化を経験することをねらいとした。具体的には

『平家物語』諸本間の比べ読みを通して、語り手の視点・ものの見方によって物語が描かれていることを確認し、さらに読み手の視点・ものの見方によって物語が捉えられることを意識することである。題材は、『平家物語』から、「敦盛最期」「河原兄弟最期」を、覚一本系（＝A）と、延慶本（敦盛最期）、百二十句本（河原兄弟最期）（＝B）とのA・Bの比較読みとして扱った。教材は、中学生であるので前記「説話」の授業と同じく、音読を重視した全文口語訳付きにして、A系（上段）とB系（下段）とを上下二段に対照して配置し、相違点や共通点など、表現の差異を確認できるプリントにした。以下は生徒の学習のまとめである。

○まとめC：敦盛のような貴族、直実のような武士は、私たちのイメージからみると、貴族は威張って偉そうにしていて、だけど心の弱さがあるようなイメージである。武士は強くて威張っていて、だけど貴族とは違い、上の者の命令に背かずに人を殺すような心の強さを持っていて、貴族は「へにゃへにゃ」、武士は「がっしり」というような、元々からのイメージがある。しかし「敦盛最期」を読むと、貴族である敦盛が、死ぬ覚悟ができていてたくましいが、逆に武士である直実は、なかなか敦盛を殺せずに心が乱れている。この様子を見ると、武士である直実も、人が死んでしまう悲しさというような人間味のある心を持っているんだな、と感じる。しかし、そう感じてしまうのは、私たちに入っている元々のイメージがあるから、そう思ってしまうのだと思う。直実のような武士でも、敵の死を悲しむ者はいるし、敦盛のような貴族にも、ちゃんと自分の意志を貫いていこうというきっちりした貴族もいる。自分達のイメージによって、その物語の読み方も変わると思う。

○まとめD：「敦盛最期」という物語Aでは、直実は武士ではなく情のある貴族（貴族に本当に情があるかは不明だが）のような人間として描かれ、敦盛は武士のような誇りを持つ人間として描かれている。ところがBでは、武士は武士、貴族は貴族として描かれている。しかし、これは私たちが「武士とは」、「貴族とは」何たるものかを、自分たちで決めてしまっていている故に、そう読み取ってしまうのであろうと思う。「武士とは、将軍に忠実で、戦いによる利益のために戦っている」、また、「貴族とは、美しく優雅である」、そういうイメージがあるから、「語り手はこのように描いている」と思っているのであろう。このイメージを作ってしまうのは、また別の物語や、他人からの影響だと思う。しかし、このように考えると、実は「語り手が語りたかった物語」と、「私たちが読んだ物語」とは違うものなのかもしれない。つまり、語り手の視点と、私たち読み手の視点が同じとは限らないからである。物語AとBとで主人公の性格に差が出てしまったのは、それぞれの書き手の思い・イメージ・視点の違いにより生じたズレであると思う。それに加えて、私たちの視点によりズレが生じてしまっても、私はそれはそれで面白い、と思う。

○まとめE：僕は、文章を読むということは、他者の考えに触れて、それを自分がどう考えるかによって自分のものの考え方を知るということだと思う。他者の文章を読み、自分が「それは違う」と考えれば、その人と自分の考え方は違うと分かり、他者の文章に

共感できれば、自分のものの考え方とはこういうものなのだと実感することができる。また、「文章を読む」ということは、他者の考えを知り、自分の考えを深めさせていくことができることでもあると思う。つまり、「文章を読む」ということは、一見他者の考え方だけを読むことのようだが、実は自分の考え方を一緒に読むということでもあるのだと思う。

「自分で」読んだり考えたりした内容だと思っているものが、実はどこかで拾ってきたり知らない間にすり込まれてしまった「他者の」意見や価値観の再現であったということは、間々あることである。もっとも、「他者の」意見や価値観であるとしても、だから自分を抑圧し征服する負の存在だとは限らない。自らも同様にかくありたいと願っている理想や良き規範の表れである場合もあり、一概に否定すべきものでもない。それはやはり、「自分で」言葉にすることによって、「他者の」意見や価値観は、本当に「自分の」ものになるのであろう。これら無意識の内の、知らない間に身についた価値観が、普段なかなか言葉になりにくいものでもあることからしても、なおさら「自分で」言葉にすることが求められるのである。

国語の授業で求められるのは、この過程を意識的に経験することである。「読む」ことに即して言えば、テキストを通して「自分が」どのように読んだのかを「自分で」言葉にすることである。「評価」や「批評」ということは、そのような「読みの構えの獲得」や「読みの方法の習得」をすることである。それは、扱う題材が現代文であれ古典であれ、共通することであると思う。

3　高等学校の古典学習　『伊勢物語』の授業から

『伊勢物語』は恋愛譚であるから高校生にも読みやすい、というのは半分は嘘（または教師の思いこみ）である。例えば四段「月やあらぬ」や六段「芥川」に描かれている強烈な「男」像は、時代も社会状況も全く異なる現代の高校生にとっては、「こんな奴いねーよ」であっさり片付けられてしまうだろう。特に国語の嫌いな生徒にとっては、好きか嫌いかという感覚の問題に矮小化されかねない。

しかし、五段「関守」では、「昔、男ありけり。東の五条わたりにいと忍びて行きけり。密なる所なれば…」という同じ状況が、「『人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにうちも寝ななむ』と詠めりければ、いといたう心病みけり。あるじ許してけり。」と全く異なった結末として描かれていること提示し、どのように考えればよいのかという問題として差し出すと、それは好悪や感覚ではなく、共通点と相違点を確認した上での思考の対象となる。

定番教材の九段「東下り」も、都と鄙との対比の視点や道行文的要素などは、教員にとっては前提の知識や概念があるから納得できるのであるが、高校1年生にとって、その解説を聞くことはどれだけおもしろいものであろうか。それよりも、「東下り」の続きにある十段「人の国にても、なほかかることなむやまざりける。」、という叙述の意図や、十二段「女をば草むらの中に置きて、逃げにけり」という「男」像の差異、十四段「そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちに思へる心なむありける。さて、かの女、『なか

なかに恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり』歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけむ、行きて寝にけり。」という叙述の視点を考える方が、文章を読んで考えることになる。

08年度高校1年生の授業で、十四段まで学習した後に、『なかなかに恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり』の類歌を、

巻12 3086　なかなかに 人とあらずは
　　桑子にぞ　ならましものを　玉の緒ばかり

巻11 2743　なかなかに　君に恋ひずは
　　比良の浦の 海人ならましを　玉藻刈りつつ

など、『万葉集』『古今集』から十五首ピックアップして併せ読んだ。以下はその時間の生徒の感想である。

○**生徒感想1**：授業では、これまで見てきた『伊勢物語』の収斂と拡散とを説明する仮説を立てた。今と違って、『伊勢物語』の時代では、いわゆる「パクリ（？）」がOKだったようだ。現代では世間から非難を浴びるものだが、昔は多くの人々が「型」を使って歌を詠んでいた。そこには、皆でよい歌を作ってゆこうという意識があったのかもしれないし、同じ「型」を使うことで、どこまで自分の「個性」を出せるのかということを意識していたのかもしれない。いずれにしろ、「型」の中で「個性」を表すという、「類型性・集団性から多方向に発展していった個性・独創性」がそこにはあった。

これは僕の個人的な意見であるが、『伊勢物語』の作者は、男の多様な行動から、一般的な男のあり方を描こうとしたのではないか、と思う。つまり、一見別人のような行動を見せる「男」を描いてゆくことで、その根底にある一つのパターン、すなわち「一般的な男のあり方」を浮かび上がらせようとしたのではないか。作者は、『伊勢物語』という「歌―物語」を通じて、「男とはこのようなものなんだよ」ということを読者に伝えようとしたのではないか。このようなことを考えて、結局は古文も現代文も同じなんだなと思った。作者が投げかけるテーマは、僕たちが同じ人間である限り、時代を超えても共通なものなのだろう。

八三段「小野雪」も教科書掲載が多い定番教材であるが、八五段「目離れせぬ雪」と読み比べた時間の生徒の感想は以下の通りである。

○**生徒感想2**：今日は『伊勢物語』の83段と85段を読んで、その関係を学びました。（中略）

この「雪」は、共通点でもあり、83段、85段の大きく違った点でもあります。83段の雪は二人を遠ざけ、85段の雪は二人をつなぐ役割を果たしています。そのせいで、83段は悲しい話、85段は心温まる話のようにも感じられます。雪が、このような正反対の働きをしていることには、初めは全く気付きませんでしたが、物語の印象をこんなにも変えています。物語が収斂して拡散してゆく、ということの意味が改めて分かりました。

同じ状況であるのに、「雪」に読み込む心情が正反対のものであるのなら、もしかしたら「雪」はあってもなくてもよいものなのかも知れません。作者が言いたいことは、親王と男との心の交流であるので、そのための表現は「雪」に隔てられた（－）悲しさ（－）でも、「雪」に結びつけられた（＋）喜び（＋）でも、ある

いは「雪」がなければ他のもので表すこともできるのでしょう。そう考えると、物語が作り出される仕組みが見えてきたように思いました。

4 おわりに

中・高等学校の「国語の授業」は、決して「国文学入門」ではない。これらの授業は、『平家物語』諸本の系統論や『伊勢物語』の成立論に深入りするものではなく、あくまでもテキストの表現を具体的に読むことを通して、生徒一人一人が自分の読みを確定していったものである。自分がこのように読む＝テキストを評価し批評するのは、このような思考の過程を経ているからだ、ということを自覚、意識化することは、言葉によって思考することが目標の国語科の授業として必要なことである。知識と技能、さもなくば情緒と風情という古典では、古典不要論に対抗できない。古典の授業の実際とは、どのような問題を差し出すのか、どのように教材を仕組むのかという、手つきの多様さと柔軟さによって決まるものだと思う。

ご意見、ご指導をお願いいたします。

※紙幅が尽きたので、研究協議の場で取り上げた高校2年生対象『枕草子』の授業については、割愛しました。広島大学附属福山中・高等学校「中等教育研究紀要」第50巻（二〇一〇年3月発行）にまとめます。